

越中瀬戸広口壺に関する粗描

－県内出土報告例から－

相羽重徳

1 はじめに

県内の遺跡出土の越中瀬戸は1997年の段階において、宮田進一氏の論考に網羅されている[宮田1997]。しかしながら、その後、県内の近世遺跡の発掘件数は急増し、それに伴い、越中瀬戸の報告例も増加してきている。そこで、最新の成果を加味しつつ、今一度、県内出土の越中瀬戸の整理、検討を行いたい。

北陸の様相について前出の宮田氏論考では、17世紀後半になると「県外への流通範囲も（富山）県内同様に縮小」し、18世紀になると、「（富山）県外ではほとんど見られなくなる」という[宮田1997（括弧内筆者加筆）]。確かに、上越地方を除き皿や碗などの供膳具や播鉢は17世紀代が中心で、18世紀以降の遺物と共伴する例は極めて少ない。ところが、「広口壺」は19世紀に至るまで絶え間なく出土しているようである。

本稿では、県内出土の広口壺を分類し、時期的変遷を提示すると共に、その流通・使用法についても若干触れてみたい。

2 越中瀬戸の定義および製陶略史

越中瀬戸の製陶史は前出の宮田進一氏[宮田1985・1997・1998]のほか、安田良榮氏[安田1988]、定塚武敏氏[定塚1974]らによって、考古学と文献史学の両面から進められてきている。ここでは、各氏の研究成果に拠りながら、本稿で扱う越中瀬戸の範囲とその歩みについて若干触れておきたい。

越中瀬戸は、富山県立山町周辺で瀬戸系の技術を用いてつくられた焼きものである。江戸時代には「瀬戸焼」と呼ばれていたが、現在は愛知県の瀬戸地方の焼きものと区別をする意味で「越中瀬戸焼」と呼んでいる。創始年代は文献史学上、天正11（1583）年以前とされている。考古学上では、最も早い越中瀬戸の窯体・窯詰め技法、製品の形状が瀬戸美濃の大窯第3段階後半から第4段階前半に類似すること、石川県石動山遺跡の天正10（1582）年焼失の一括遺物、および上市町弓庄城の落城（1582年）以前の溝から創始時期の製品が出土していることから、1580年代には成立していたと考えられている。その後、慶長年間には登窯が導入され、寛永5（1628）年頃からは胴窯（単房式の地上窯）が普及した。多くは胴窯であり、農業のかたわらに陶器を焼く程度であった。加賀藩の庇護のもとに発祥した越中瀬戸は、18世紀中頃に金沢城下が大火にみまわれるなど藩の財政が圧迫されるにつけ、衰退していき、19世紀初頭には再興九谷が焼かれ始めると需要は減少したという。明治年間に操業は一端途絶えるが、昭和に入り復興され、現在でも焼かれている。

製品は碗、皿、坏、向付、壺、蓋、茶道具（建水、茶入、水指など）、鉢、播鉢、四耳壺、灯明受皿、陶鍾などがある。大窯段階である17世紀初頭までは瀬戸美濃との類似性が見られるが、登窯期以降は肥前系陶器との共通点が多くなる。胎土は概して瀬戸美濃より硬質で緻密な白土を用いるが、播鉢や壺などの大型品は砂粒を多く含む黄澄白色を呈する軟質のものが多くみられる。こうした器種による粘土の使い分けは瀬戸美濃と共通する技法である。

窯跡の調査は、昭和15年と53年に行われているが、詳細は不明である。しかし、採集・分布調査などによる資料の蓄積は精力的に行われている。

3 壺形製品の分類

越中瀬戸の器種分類をおこなった宮田氏は壺類を茶入、壺、双耳壺、四耳壺に分類した〔宮田1997〕。本稿でも、その分類を妥当とし、踏襲しているが、「壺」に関しては、(A) 器高が5～10cm程度で、胴部に最大径を持ち、頸部と肩部の境で縮れたのち、直立あるいは外反気味に立ち上がる短い頸部を持つタイプと、(B) 器高が20～23cm程度で、胴部の長いタイプに分けられる。本稿では便宜上、(A) を広口壺、(B) を長胴壺と呼称する(註1)。それぞれの、器種について、県内の出土傾向を見ていこう。

茶入：県内では出土例がない。前田育徳会尊経閣文庫には、17世紀末から18世紀初頭の作とみられる24個の茶入が伝世している。箱書きには「越中瀬戸焼御茶入」と墨書されている。また、元禄期に記されたとされる「三州名物往来」には「瀬戸茶入」とある。

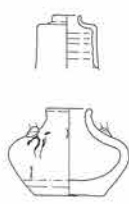
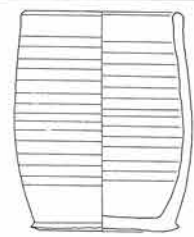
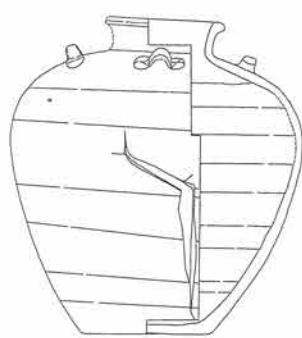
広口壺：県内に数多く出土している。黒川窯と小森窯(第2図中央)については「釜」(茶釜)であるとの指摘〔藤澤1993〕がある。確かに、出土した広口壺の中には外面にススが付着しているものがみられるのであるが、耳がつかないことから、その当否については後日を期したい。

長胴壺：県内では清里村高禅寺遺跡〔高橋ほか1999〕で出土例がある。高禅寺遺跡では、中に火葬骨が入られた状態で出土している。また、富山県魚津市印田近世墓〔麻柄・斎藤1981〕では同じく焼骨が入った状態で出土していることから、主に骨蔵器として使用されていたと考えられる。但し、印田近世墓の長胴壺は法量が類似するものの、壺形を呈し、異なった形態を為すことから、同一系列上に位置するかは検討の余地がある。また、長胴壺が骨蔵専門器か否か(あるいは転用か)についても十分に検討されねばならない。

双耳壺：県内での出土例はない。近世期の瀬戸の双耳壺は、江戸遺跡内でたびたび蔵骨器に使われることでよく知られている。

四耳壺：県内での出土例はない。葉茶壺と考えられる。

匣鉢：新井市旧得法寺、上越市木田遺跡で出土している。本来、匣鉢は焼成の際に降灰から製品を保護するための窯道具であるから、貯蔵具に属する壺類には分類されない。しかしながら、既に明らかにされているように、匣鉢の中に焼成時さながらに小皿などの製品を入れたまま出荷する例がある。この場合は(転用であるが)運搬具として分類されるのが適切であろう。また、匣鉢として報告されているものの内、鉄釉を掛けたものや、産地不明ながら上越市黒田古墳群でみられるように内面にススが付着しているものが消費

茶入	広口壺	長胴壺	四耳壺	
				
双耳壺	匣鉢			
				

S=1/8

S=1/8

第1図 壺類分類表

S=1/6 (四耳壺を除く)

遺跡から出土しており、水指・建水や火入として転用されているとおぼしき製品も存在する。富山県小杉町黒河尺目遺跡でも匣鉢の底と考えられる窯道具の出土が報告されているが、報告者により「日常雑器」として使用されていた可能性が指摘されている〔安念1985〕。一方で、越中瀬戸の大窯期の製品とモデルである瀬戸美濃の大窯期の製品との比較の中で検討した藤澤氏は、錆釉の施された匣鉢形製品の一部を水指として指摘している〔藤澤1993〕。これらについても消費地側で転用（「見立て」）したのか、あるいは、製作地で既にそれを意図して作陶されたのかは検討されねばならないだろう。

本来であれば、貯蔵を意図した上記の壺類すべてについて検討すべきであるが、県内においては出土例が極めて少ない、乃至は無い器種があることから、それらは今後の報告の充実を待ち、再度検討することとし、本稿では次章以下、最も数多く出土している広口壺について考察していきたい。

4 分析資料

ここでは煩雑さを避けるために概要のみ記すこととし、詳細については各報告書を参照願いたい。

【生産地】

黒川窯〔宮田1985、安田1988〕

上市町黒川に所在する大窯。郷川の右岸の丘陵上に立地する。天正年間から17世紀初頭頃。

小森窯〔宮田1985、安田1988〕

滑川市小森に所在する大窯。黒川窯と同じ丘陵上の約600m離れた位置に築かれた。黒川窯より若干遅れて成立し、17世紀初頭までつづく。

新瀬戸古窯〔三鍋・渡辺2001〕

立山町前沢に所在する。1985年に立山町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査により位置が明らかになった。他の窯が総て段丘上に立地する中で、唯一崖を利用して段丘下に築かれた窯として注目される。1999年には県営圃場整備事業に伴い、試掘調査が行われ、窯体、焚き口、灰原が検出され、多くの遺物が出土した。その後、2000年には農道舗装部分（145㎡）の発掘調査が行われた。その結果、包含層内から17世紀後半～18世紀前半の遺物群が確認された。

孫市窯〔宮田1997〕

立山町下瀬戸に位置する。1978年に富山県埋蔵文化財センターが試掘調査を行い、窯の一部を確認した。遺物は18世紀以降のものが主体を占める。残念ながら実測図は図化されていないが、写真により出土品の確認を行ったところ、広口壺の焼成がなされていたことは確実である。

【消費地】

以下、広口壺が出土しており、年代が比較的判明している消費地遺跡を記す。西に位置する遺跡から順に記載した。遺構の廃棄・埋没年代観については、出土遺物の主体を為すグループの下限を当てた。出土遺物と実年代との対応関係については、新潟県内の近世遺跡で出土陶磁器の最大量を占める肥前系陶磁器を主眼に置き決定している。肥前系陶磁器の編年は基本的に大橋康二氏の研究〔大橋1993〕に準拠（註2）し、その内、波佐見焼に関しては中野雄二氏の研究〔中野2000〕に準拠（註3）した。

高田城下鍋屋町遺跡〔戸根1986〕

上越市東本町に位置し、関川左岸の沖積段丘状（高田面）に立地する。高田城の北東で奥州街道が関川を渡る稲田橋の西詰にあたる。標高は9.5m。関川改修事業に伴い、新潟県教育委員会（以下 県教委）が1984年

に調査した。17世紀後半から19世紀の遺物が出土した。特筆すべきは鋳物の鋳型などが含まれ、調査区ないしは近辺で鍋・釜・梵鐘類を鋳造していることが判明した。

p7：溝に近接して掘られた不定形の土坑である。何回にも渡り掘り返されている。大橋Ⅳ期後半からⅤ期の染付磁器碗・皿を主体とし、土製鋳型、17世紀代の甕類が共伴する。廃棄年代は19世紀と考えた
い。

木田遺跡 [北村2001]

上越市大字木田に位置し、関川とその支流正善寺川の合流付近の沖積段丘状(高田面)に立地する。標高は6～7m。約3km西側に春日山城が位置している。北陸自動車道建設に伴い、県教委が1982～1985年に調査した。

SD5：幅1.5～2.0mを測る溝。大橋Ⅲ～Ⅳ期前半の白磁・染付碗、皿を主体に共伴する。若干、大橋Ⅴ期の遺物が混じるが、切り合い関係にある遺構からの混ざり込みの可能性がある。埋没年代は18世紀中頃と考えられる。

SE153：径約1m、深さ1.4mの小型の井戸。波佐見Ⅴ-1期の磁器皿を主体とし、大橋Ⅲ～Ⅳ期に属する刷毛目鉢や甕と共伴する。一部、17世紀代の肥前系溝縁皿が共伴する。廃棄年代は18世紀前半～中頃と考えられる。

SD218：3×2間の掘立柱建物に伴う区画溝と考えられている。大橋Ⅲ～Ⅳ期前半の肥前系陶磁器を主体として共伴する。17世紀後半から18世紀前半の廃棄。

SK263：不整形の大型土坑で、肥前系の大橋Ⅳ期後半に属する青磁染付やⅤ期に属する「素書」による染付磁器を主体とする。その他、京焼風の土瓶が共伴する。明治期の資料や瀬戸系磁器が報告されていないことから、19世紀初頭の廃棄年代が与えられよう。

SK350：大橋Ⅳ期に該当する薄手の京焼風唐津碗が共伴する。18世紀代の廃棄年代が与えられよう。

旧得法寺 [県教委・事業団1998]

新井市大字青田に位置し、高田平野の南西に接する南葉山地の一支稜先端部の舌状台地上に立地する。標高は72～91m。上信越自動車道建設に伴い、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下 事業団)が1995年に調査した。近世陶磁器は唐津(ママ)2点、伊万里(ママ)1点、越中瀬戸2点が出土し、総て17世紀代に属するという。文献史の成果から、前身の「観音堂」が天正6(1578)年に住持が退転し、廃失したのち、寛永9(1632)年、得法寺の初代住職が再建し、移り住んだが、寛文11(1671)年に現在地へ移転し、今日に至るまでの経緯が示されている。従って、越中瀬戸は17世紀第2～第3四半期頃に属する可能性が高い。

新保遺跡 [石川ほか2001]

高田平野北東部の柿崎町大字上直海字新保に位置し、埋没段丘と水田部に立地する。標高は4.9～7.8m。国営圃場整備事業にともない、事業団が1997・98年に調査した。平安時代のほかに14世紀から16世紀までの中世集落と17・18世紀の近世集落の存在が確認された。近世の遺構は埋没段丘上の90×50mの範囲に散在。掘立柱建物が3棟検出されている。内SB10は規模・柱径・丘陵部の頂上に位置していることから特殊性が指摘されている。また、水田部から性格不明の方形プランの遺構が確認されている。

近世に属する遺物は包含層が存在せず、遺構内からの出土が中心である。肥前系小皿が大半を占める。主体は17世紀から18世紀前半である。

98SE17：波佐見Ⅴ-1期の蛇ノ目釉剥ぎ皿と17世紀代の瀬戸系播鉢と共伴する。

98SE169：近世陶磁が「廃棄されたと思われる」井戸である。大橋Ⅲ～Ⅳ期に含まれる内野山窯系の銅緑

釉蛇ノ目釉剥ぎ皿や京焼風唐津、肥前系播鉢が主体を為し、波佐見Ⅴ－Ⅰ期の磁器皿がみられる。その他、17世紀代の絵唐津鉢や瀬戸系の播鉢が共伴する。廃棄年代は17世紀末～18世紀前半頃と考えられる。

98SE200：波佐見Ⅴ－Ⅰ期の蛇ノ目釉剥ぎ皿、17世紀末～18世紀初頭頃の肥前系陶胎染付の碗、および内面に格子目叩き痕を持つ肥前系陶器甕が共伴する。廃棄年代は17世紀末～18世紀初頭頃と考えられる。

正尺A遺跡〔尾崎ほか2001〕

豊栄市葛塚に位置し、旧大口川左岸の自然堤防上に立地する。標高は2 m。日本海沿岸東北自動車道建設にともない、事業団が2000年に調査し、古墳時代前期の遺物包含層および竪穴住居等の遺構を検出した。その他、平安時代と江戸時代の遺構も確認している。江戸時代の遺物は18世紀中頃以降の陶磁器類が主体を為す。

SK5：18世紀中頃～後半の極めて遺存率の高い遺物が共伴する。肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、会津本郷系陶器、焙烙が出土した。また、木製農具の共伴および文献史料での研究成果から、農村部の様相を色濃く示すと考えられる。

5 広口壺の分類

総て、製作技法は共通する。ロクロ成形し、内外面を撫でて器面を調整する。底部は糸切り。胎土は、黄白色を呈し軟質で粗、白色粒子を多く含むものが多い。黄灰色で比較的硬い胎土も少量ある。全面に鉄釉を掛ける。鉄釉は淡黄褐色を呈し光沢のあるもの、褐色のもの、赤褐色で光沢が無くザラついたもの（錆釉）などがある。県内でこれらに伴う蓋類の共伴例はなく、存否は不明である。

法量の大小により、二分することができる。即ち、小：A類、大：B・C・D類となる。

A類：法量が比較的小さく、胴部最大径が口径とさほど変わらない。口唇端部が肥大し、外反気味となる。

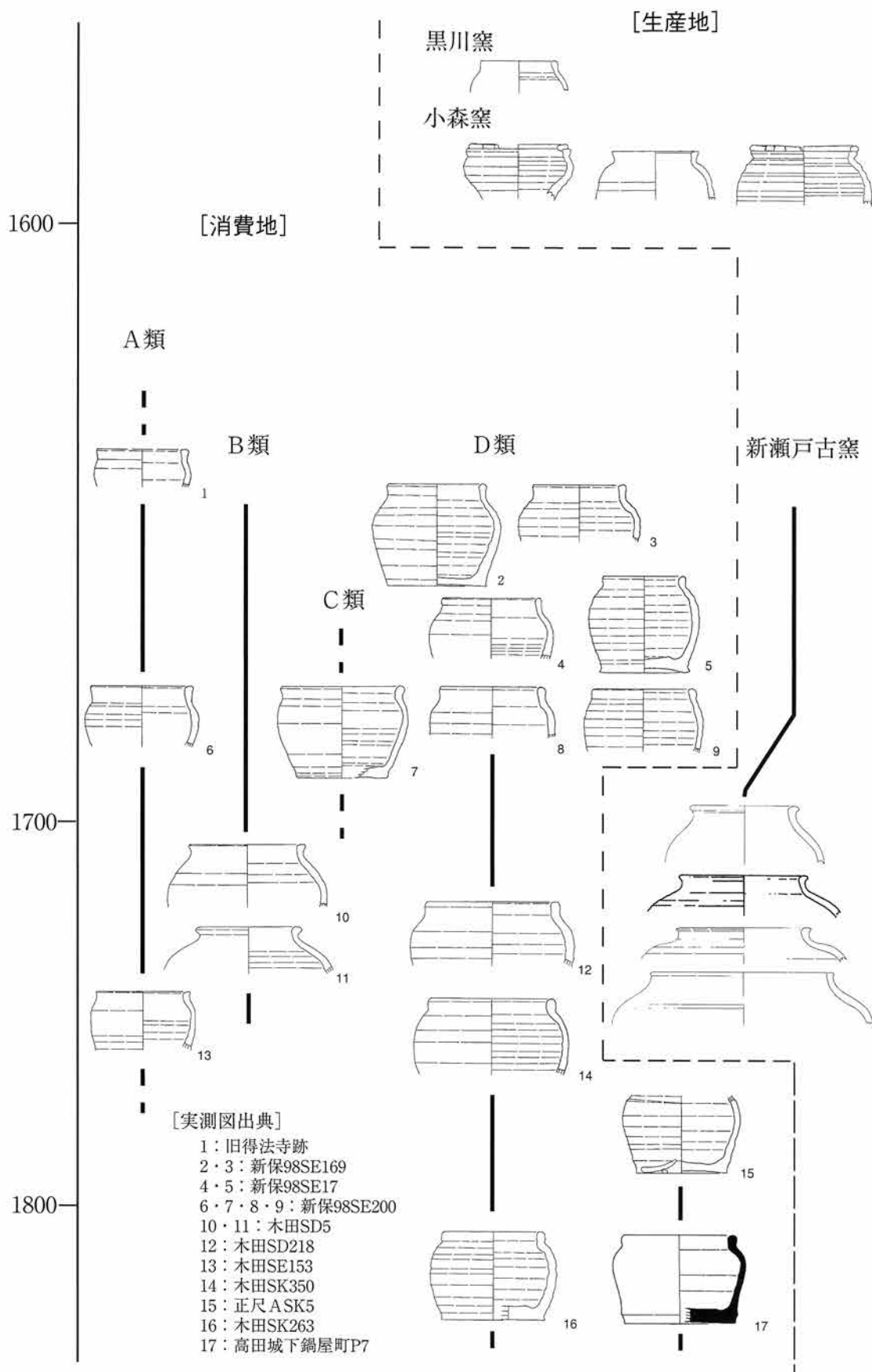
B類：口縁端部が外側に肥大する。器壁は比較的薄い。新瀬戸古窯の出土品に類似する。

C類：底部から開き気味に立ち上がり、胴部上半で最大径を迎える。括れは弱く、口縁部が外反する。口径は胴部最大径とさほど変わらない。

D類：口縁部は直立するか、若干外反する。最大径は胴部中位から上位に位置する。口径は胴部最大径より小さい。頸部から口縁にかけての形態にはいくつか認められ、撫肩で短頸になるタイプ、口唇部の最大高が外縁に位置し端面が内傾するタイプと、内縁に位置し外傾するタイプ、口縁端部が平坦になるタイプに分けることが出来そうである。

これらを、遺物の共伴関係から時系列に並べたのが第2図である。御注意頂きたいのは、年代の設定は遺構の廃棄年代及び形式学的見知から決定している。資料数の少なさから、画期は判然としない。ここでは予察を行うに留めたい。

I期：16世紀末～17世紀中頃、II期：～18世紀中頃、III期：～19世紀中頃となろう。I期は大窯段階である。県内の出土例は現在までのところ明確な報告例はない。流通量の少なさの現れと考えたい。II期は登窯と胴窯を併用した生産体制へ移行した段階である。県内には出土量が増え、器種も豊富となる。III期は判然としないが器種が再び減少し、法量が小さくなる傾向があるように見受けられる。



第2図 広口壺の変遷

S=1/6

6 流通

流通圏は供膳具の出土分布より、上越地域から柏崎市平野周辺までを主体とする。豊栄市、中条町、神林村および北海道上ノ国遺跡といった日本海側で散見されることから、日本海交易ルートが指摘できる。

上越地域をしてみると供膳具、壺類ともに万遍なく出土し、まさに宮田氏のいう第一次流通圏の様相〔宮田1998〕を照応している。南方へは関川流域の四ツ屋遺跡、旧得法寺跡、関川関所跡、大堀遺跡等で一定の出土量を見ることから、関川水系を利用した河川交通による内陸部への流通も考えられる。あるいは、上越と信濃を結ぶ街道交通の活発さを反映しているのであろう。関川関所跡における陶器の産地別比率では唐津が18%供給されるものの、京・信楽系が50%を占め、唐津が大半を占める日本海側とは異なった流通傾向〔岡田ほか2000〕にある。その中で、比率が問題視されようが、越中瀬戸広口壺が供給されているという事実はその用途と流通形態を考える上で極めて興味深い資料といえよう。特筆すべきは、青海町寺地遺跡で陶鍾が出土している〔相羽2002〕点である。このことは、同じ第一次流通圏内でも流通器種・物量に濃淡が存在している可能性を示唆している。

下越地域では見附市元屋敷遺跡で広口壺の報告例（註4）があるほか、新発田城跡で播鉢（註5）の破片が少量ながら見られることから、下越での流通量は極めて少量であると考ええる。但し、加茂市でも広口壺、あるいは匣鉢の底部と思われる破片が、18世紀前半～中頃の陶磁器類とともに採集（註6）されている。また、信濃川が日本海に注ぐ河口近くに位置する新潟市でも広口壺が確認されている（註7）ことから、信濃川流域においてもやはり少量ながら流通していたと考えられよう。今後、更なる発見が見込まれる。

中越地域の山間部では長岡城跡、小千谷市金塚遺跡、十日町市道端A・B遺跡といった著名な近世遺跡での出土報告例はない。唯一、湯沢町宮林B遺跡で大正5年～昭和初期にかけて捨てられたゴミ穴から「越中瀬戸系鉄釉壺」「越中瀬戸系鉄釉鉢」の報告例〔佐藤ほか1987〕があるが、他に類例を見ない器形であるため、再検討を要すると思われる。

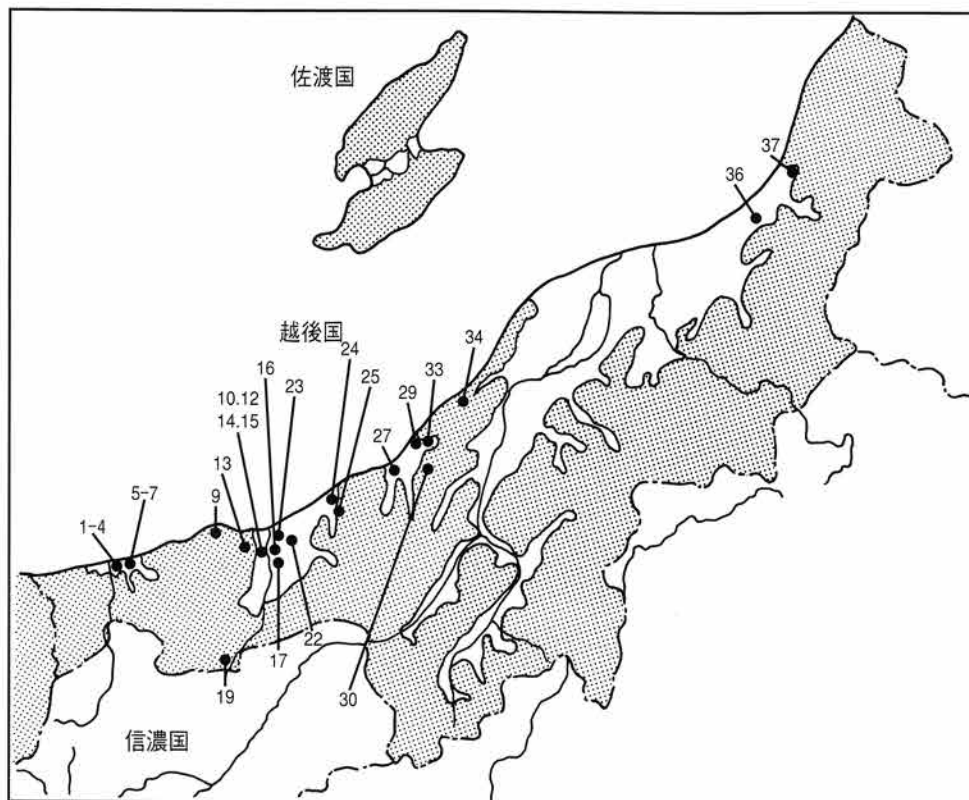
佐渡では未だ出土報告例がないが、近年の調査で佐渡奉行所跡から数点の播鉢片が確認されているという（註8）。

7 広口壺の用途について

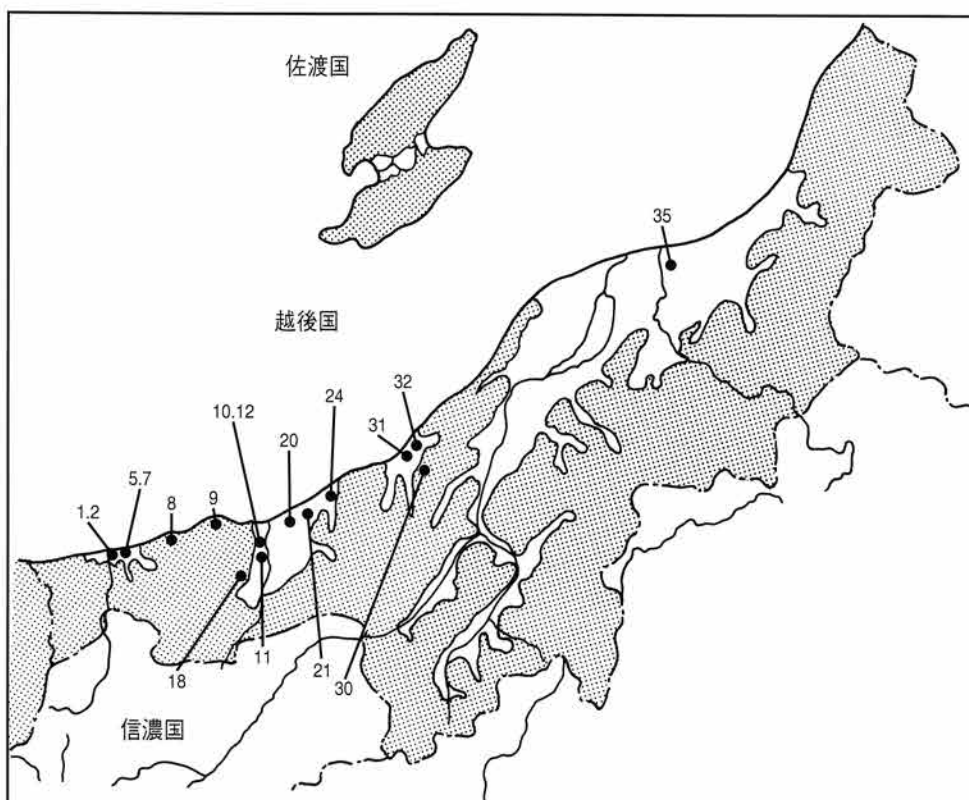
用途については、①顕著な使用痕が明確に認められない。②用途を復元できる良好な出土状況が報告されていない。以上の理由から判断し得ない。そこで、他の消費地における同様な法量の壺類の使用例から検討してみたい。

江戸遺跡から出土したやきものを分類した井汲隆夫氏〔井汲1992〕は、壺類を器高により三分した。即ち、12.0cm未満を「小壺」、12.0～30.0cmを「中壺」、30.0cm以上を「大壺」とした。本稿で取り扱った越中瀬戸広口壺は小壺～中壺に位置する。井汲氏は小壺の用途を「茶入」「うるか壺」「種壺」「塩壺」などとし、中壺は「うるか壺」「種壺」「お歯黒壺」「蔵骨器」に使用されたとした。肥前系磁器の小型壺も種壺・塩壺として使用された〔宇治・藤井1994〕という。また、蔵骨器とともに胞衣壺といった信仰に係わる使用例も近年、民俗例との対比の中で明らかにされつつあり、越中瀬戸の壺類との関係についても注意していく必要がある。県内では、上越市黒田古墳群〔尾崎2002〕で16～17世紀代と考えられる墓壙群に近接して複数の遺存率の高い広口壺が出土しているし、青海町寺地遺跡〔相羽2002〕では神社の鎮座する小丘内からやはり同様に複数の遺存率の高い広口壺が出土していることから、その関連が注目される。

使用痕が認められる例としては、石川県金沢市醒ヶ井遺跡で18世紀末から19世紀代の遺物が共伴する土坑



第3図 越中瀬戸出土分布図（供膳具・播鉢）



第4図 越中瀬戸出土分布図（広口壺）

※ [宮田1997] を改変

から口縁部が欠損した広口壺が出土している〔谷口2001〕。連続的に打ちつけられていることから、煙管による打痕と考えられ、火入としての使用痕と判断される。各時代によって使用方法が異なっていた可能性があるが、これら貯蔵具は転用を繰り返されて廃棄されていることが多いため、その用途を特定するのは困難である。

いずれにしても、壺類は貯蔵器としての役割を担っていたことは間違いないと考えられる。

8 まとめ

大窯段階と登窯あるいは胴窯の段階における広口壺の形態を比較すると、大窯段階に茶陶の影響を垣間見ることが出来る。大窯段階の広口壺は、壺本来の貯蔵具としての用途というよりも、主に水指や建水として使用されていたものと考えられる。水指の歴史に目を転じてみる。起源については諸説有り、未だ定まった見解には至っていないが、多くは茶人により種壺や緒桶といった日常的な器が見立てられたり、変化したものと考えられている。16世紀の初頭には既に備前や信楽の壺・甕・播鉢が見立てられていたという。茶会記によれば、天正十六（1588）年には「備前や信楽の水指が急増」し、翌十七（1589）年には「瀬戸水指の使用頻度の高まり」がみられるという。元和年間（1615-23）以降は、桃山様式の茶陶とは異質な、高取焼に代表される釉や絵付で装飾した優美な製品が特徴となる〔赤沼1995〕。一方、加賀藩および産地側の情勢をみると、慶長14（1609）年、利長が富山城から高岡城へ移り、慶長19（1614）年に当地で病没してからは、加賀藩の文化が金沢に集中し、当時、越中唯一の陶窯の地であった瀬戸村も藩の東端の地となり、しだいに農民化の傾向を強めた〔定塚1974〕。さらに加賀では17世紀中頃に古九谷窯、大樋窯が相次いで開窯した。越中瀬戸では江戸中期以降胴窯の普及により次第に組織化された陶農併存体制がとられた。この頃には文化の中心から遠く離れていたため、雅陶の産地とはならず、一地方の「雑器生産地」で終えた〔定塚1974〕。茶陶の世界においても、17世紀中頃から水指の好みの変化、及び、17世紀後半から武家階層に浸透し始めた「点てずに嗜む茶」〔長佐古2001b〕への喫茶法への変化が四耳壺や建水形の広口壺を駆逐していったと考えられる。

県内の広口壺の出土状況をみると、17世紀中頃からみられるようになる。このことは、越中瀬戸の広口壺がこの頃に、徐々に茶陶色を失い、本来の用途である貯蔵具にその主たる用途が移行しつつあることを物語る。同時に、茶陶と共に焼かれていた碗、皿類の県内の流通は減少するのであるが、それらと同地域において広口壺が出土するようになるという現象は既存の流通路に乗って広口壺が搬入されたためと考えられる。このことは、販路の減少というよりも、寧ろ、当時、国内全域に広大な販路と生産量を誇った肥前系陶磁器の碗、皿、播鉢類との競争を避け、既に確立されていた県内への越中瀬戸の販路を利用した、貯蔵具という用途に絞った販売方針の変換として評価すべきではないだろうか。但し、流通の過程において、消費者が貯蔵器としての用途を有した広口壺、そのものを欲したのか、あるいは、広口壺の中に商品を詰めて販売された（即ち、出土する広口壺は外容器）のかは、今後、明らかにしていかなければならない課題である。

9 おわりに

県内の近世遺跡の調査は、増加傾向にあるといえども未だ少なく、従って越中瀬戸の報告例も少量である。特に年代の限定しうる一括資料に乏しいため、その全体像を把握されたとはいえない状況にある。本稿においても資料不足の感は否めず、今後の研究の充実に向けてその手掛かりを提供するという試論の域を脱し得ない。年代の設定についても細分した編年が可能であろうし、使用年代（耐用年数）についての検討も充

分であるとは言い難い。従って、今後、資料の蓄積を待つて再度検討を要する点をお断りしておきたい。用途の解明に関しては、考古学的な出土状況・使用痕の詳細な観察・分析は云うに及ばず、文献史料や科学的分析などによる多角的なアプローチが必要となろう。

本稿は、平成14年1月に行われた新潟考古学談話会の発表資料を基に起草したものである。筆者はその会において、参加された方々から、多くの貴重な御指摘を賜った。また、本稿に関連することのみならず考古学全般にわたり事業団職員の方々、及び、考古学関係の諸先生・諸先輩方には数え切れない程の御指導・御鞭撻を賜った。深謝申し上げる。にもかかわらず、本稿をまとめるにあたり、筆者の力不足により、総てを生かし切れなかったことは誠に遺憾であり、慚愧に堪えない。ここに今後の更なる精進をお誓い申し上げるとともに、引き続き御指導・御叱正を賜りたく、重ねてお願い申し上げます。

本稿を起するにあたり、次の方々から貴重な資料提供・御教示を賜った。末筆ながら、ここに明記し、感謝の意を表したい。(五十音順、敬称略)

安藤正美、諫山えりか、伊藤秀和、伊藤啓雄、大橋康二、尾崎高宏、小林義廣、高橋理彦、滝川邦彦、鶴巻康志、本間敏則、宮田進一

平成14年3月 校了

註

- 1) 名称の問題は、他窯の製品におけるモデルとコピーの関係、法量的見知、用途による分類、形式的見知、文献上の記載(使用当時の呼称)などから、十分な検討を加えた上で決定すべき重大事項であると考え。従って、本稿では安易に名称を用いることを避け、仮称とすることをお許し頂きたい。尚、本稿における広口壺は、考古学的な法量的見知から「小壺」、形式的見知から「短頸壺」と呼ばれることもある。一方で、茶陶の世界では茶入を「小壺」と表記する文献もある。これは、葉茶壺を「大壺」というのに対し、抹茶壺のことを「小壺」と呼ぶことがある[下中他 2000] ことに由来すると思われるが、互いに異なる研究史の上に位置するそれぞれの名称を用いることに起因する混乱である。こうした、近世陶磁器の器種による分類の難しさについては長佐古真也氏が端的にまとめた概論[長佐古 2001a]に詳しいので参照願いたい。
- 2) 大橋編年はⅠ期:1580~1610年代、Ⅱ期:~1650年代、Ⅲ期:~1690年代、Ⅳ期:~1780年代、Ⅴ期1860年代である。
- 3) 波佐見編年はⅠ期:1600年前後~1610年代、Ⅱ期:1620年代~1630年代、Ⅲ期:~1650年代、Ⅳ期:~1680年代、Ⅴ-1期:~1740年代、Ⅴ-2期:1750年代~1770年代、Ⅴ-3期:1780年代~1810年代、Ⅴ-4期:1820年代~1860年代である。
- 4) 筆者実見。報文中では「越中瀬戸?」と記載されている[安藤 1995]が、報告者の安藤氏より越中瀬戸の可能性が極めて高いことを御教授頂いた。
- 5) 鶴巻康志氏の御教授による。
- 6) 伊藤秀和氏の御教授による。
- 7) 諫山えりか氏の御教授による。
- 8) 滝川邦彦氏の御教授による。

引用・参考文献

- 相羽重徳 2002「第Ⅴ章 遺物 1 土器・陶磁器」『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 赤沼多佳 1995「水指の変遷と種類」『水指-茶席の水器-』茶道資料館
- 安藤正美 1995『元屋敷遺跡Ⅰ』見附市埋蔵文化財調査報告第15 見附市教育委員会

- 井汲隆夫 1992「第3節 やきもの分類表」『内藤町遺跡』第Ⅱ分冊〈遺物編〉 新宿区内藤町遺跡調査会
- 石川智紀ほか 1998『旧得法寺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第86集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀ほか 2001『新保遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第103集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宇治章・藤井伸幸 1994「『よみがえる江戸の華』展－くらしのなかのやきもの－」佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニューサイエンス社
- 岡田茂弘ほか 2000『北国街道 関川関所跡』妙高高原町文化財調査報告書第11集 関川関所跡発掘調査会
- 尾崎高宏ほか 2001『正尺A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2002『黒田古墳群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第111集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北村 亮 2001『木田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第105集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤雅一ほか 1987『川久保遺跡Ⅱ 宮林B遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告第6輯 湯沢町教育委員会
- 下中直人編 2000『増補 やきもの事典』平凡社
- 定塚武敏 1974『越中の焼きもの』巧玄出版
- 高橋正志ほか 1999『等仙寺・梶木・山崎塚遺跡』清里村教育委員会
- 谷口宗治 2001『金沢市醒ヶ井遺跡』金沢市文化財紀要173 金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）
- 戸根与八郎 1986『高田城下鍋屋町遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第41 新潟県教育委員会
- 長佐古真也 2001a「Ⅶ江戸の遺物 「器種」という分類」『図説 江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会編 柏書房株式会社
- 長佐古真也 2001b「近世期の日常喫茶の陶磁器－信楽における小物生産転換への予察－」『近世信楽焼をめぐる』関西陶磁史研究会
- 中野雄二 2000「波佐見」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会
- 藤澤良祐 1993『瀬戸市史 陶磁史篇四』瀬戸市史編纂委員会編 愛知県瀬戸市
- 麻柄一志・斎藤隆 1981『富山県魚津市 印田近世墓』魚津市埋蔵文化財調査報告書第8集 魚津市教育委員会
- 三鍋秀典・渡辺樹 2001『新瀬戸古窯』立山町文化財調査報告書第32冊 立山町教育委員会
- 宮田進一 1985「越中瀬戸の窯資料（1）」『大境』第12号 富山県考古学会
- 宮田進一 1997「第4章第4節 越中瀬戸の変遷と分布」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 宮田進一 1998「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史－地域間交流の視点から－』地方史研究協議会編 雄山閣
- 安田良榮 1988『越中瀬戸－発祥四百年記念誌－』越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会
- 安念幹倫 1985「Ⅲ 遺物 5 中世・近世の遺物」『都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（6）』富山県埋蔵文化財センター

第1表 新潟県内の越中瀬戸出土遺跡一覧

	所在地	遺 跡 名	碗	皿	向付	播鉢	香炉	匣鉢	灯明受皿	壺 類		備 考
										広口壺	その他	
1	糸魚川市	大塚遺跡	○	○	○		○			○		
2	糸魚川市	立ノ内遺跡	○							○		※
3	糸魚川市	三屋原遺跡		○								
4	糸魚川市	三屋原B遺跡		○								
5	糸魚川市	中原遺跡	○							○		
6	糸魚川市	小出越遺跡	○									
7	糸魚川市	岩野下遺跡				○				○		
8	能生町	十二平遺跡								○		
9	名立町	東川原遺跡		○						○		
10	上越市	木田遺跡		○		○		○	○	○		
11	上越市	高田城下鍋屋町遺跡								○		※
12	上越市	高畑遺跡	○		○	○				○		
13	上越市	春日山城跡		○								
14	上越市	鉄砲町遺跡		○								
15	上越市	四ツ屋遺跡		○								
16	上越市	横曽根I遺跡		○								
17	上越市	子安遺跡		○								
18	新井市	旧得法寺跡						○		○		
19	妙高高原町	大堀遺跡		○								
20	吉川町	樋田遺跡(第一次)								○		
21	吉川町	早生田遺跡								○		
22	浦川原村	宮平遺跡		○								
23	頸城村	水久保遺跡				○						
24	柿崎町	新保遺跡		○						○		
25	柿崎町	浦沖遺跡	○									
26	柿崎町	芋島遺跡							○			
27	柏崎市	柏崎町		○		○						
28	柏崎市	行塚遺跡									○	壺・鉢か?
29	柏崎市	北田遺跡	○									
30	柏崎市	音無瀬遺跡		○								
31	柏崎市	戸口遺跡C地点								○	○	
32	柏崎市	西岩野遺跡								○		
33	刈羽村	弘川遺跡		○								
34	出雲崎町	御金蔵跡(第二次)		○								
35	豊栄市	正尺A遺跡								○	○	
36	中条町	下町・坊城遺跡(A地点)			○	○						
37	神林村	天王前遺跡				○						

※筆者実見の上、越中瀬戸と判断したもの

第2表 消費地遺跡における共伴遺物

遺 跡 名	遺構名	肥前陶器 ^{※1}				肥前磁器 ^{※1}				京・信楽系	そ の 他	主体となる年代
		I・II	III	IV		II	III	IV	V			
高田城下鍋屋町遺跡	P 7		○					◎	◎			18C後半～19C
木田遺跡	SD 5	○	○			○	○		○			17C～18C前半
	SE153	○	○	○				◎				18C前半～中頃
	SD218		◎				◎	◎				17C末～18C中頃
	SK263			○				◎	◎		大橋Ⅴ期土瓶	18C後半～19C
	SK350			○								17C末～18C中頃
旧得法寺	—	○	○									17C中頃
新保遺跡	98SE17							◎				17C末～18C前半
	98SE169		◎	◎				○				17C後半～18C前半
	98SE200		○	○				◎				17C後半～18C前半
正尺A遺跡	SK 5			○				◎	○	○ ^{※2}	会津本郷系片口	18C末頃

※1 肥前陶磁器の年代観は大橋康二氏の研究に依る
 ※2 色絵半球碗